

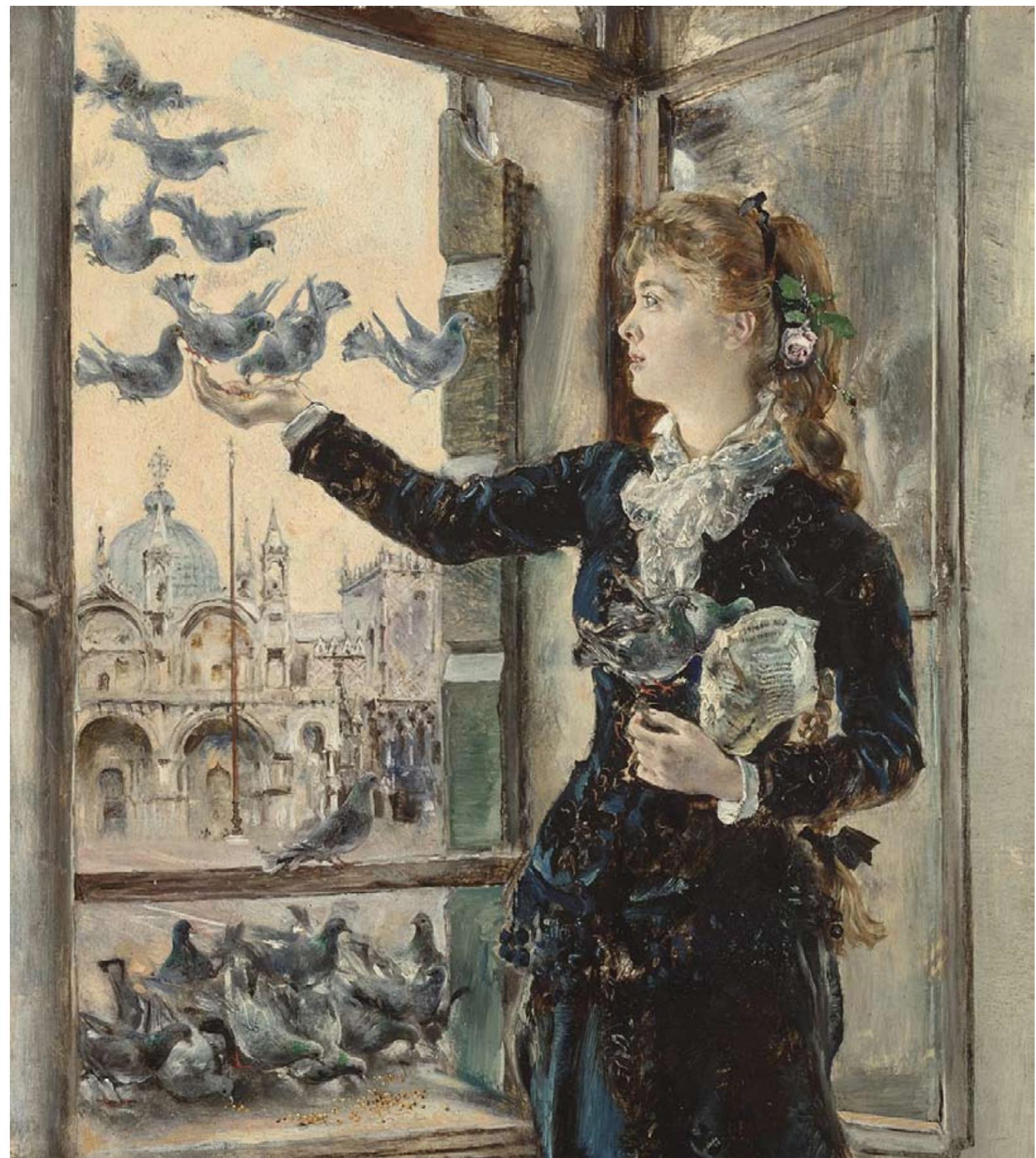
月刊 ウィーン

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 391**

GEKKAN-WIEN 2022年7&8月号



Anton Romako, Mädchen an einem Fenster zum Markusplatz, Tauben fütternd, um 1875 Foto: Johannes Stoll / Belvedere, Wien

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

124

島根県の丸山達也知事は、六月二日の県議会本会議で中国電力島根原子力発電所2号機（BWR、八二万kW）の再稼働を容認する考えを表明した。

効果を踏まえ、島根2号機の再稼働を容認する姿勢を示した。

学院に進学した。一三年に「ニイチエ研究」を出版し、奈良の古寺を巡り、一九年に「古寺巡礼」を出版。二〇年に東洋大学講師、二二年に法政大学教授、二五年に京都帝国大学助教となり、京都市左京区に転居。二七、二八年にドイツ留学。三一年に京都帝国大学教授、三四年には東京帝国大学教授。「人間の学としての倫理学」では、西洋哲学の個人主義を批判し、人間という言葉が本来意味するように、それは間柄的存在であり、個人と社会の相互作用が不調に陥ると全体主義・個人主義が台頭すると述べた。

近頃同社に対する正式回答とともに、国、立地・周辺市町村、隣接する鳥取県への伝達がなされる運びである。BWRの再稼働に係る地元理解表明がそろったのは、二〇二〇年一月の東北電力女川原子力発電所2号機に続き二基目となる。同機の再稼働に向けては、新規制基準への適合性に係る審査で二〇二一年九月に原子炉設置変更許可に至った後、現在、設計・工事計画認可の審査が進められている。

丸山知事は、福島第一原子力発電所事故による被災地を自ら訪れた経験を振り返り、「失われたものを取り戻すことの大変さを痛感した」と述べた上で、島根県民の原子力発電に対する不安に鑑み「苦渋の判断だった」と強調した。本会議の場で、知事は島根2号機の再稼働に向けて、中国電力および国に対する要請事項案を発表した。

調に陥ると全体主義・個人主義が台頭すると述べた。日本の思想と西洋哲学の融合、あるいは止揚とでもいべき境地を目指した稀有な哲学者と評価される。主著の「倫理学」は、近代日本における独創性を備えた最も体系的な哲学書の一つと言われ、その倫理体系は和辻倫理学と呼ばれる。「日本倫理思想史」では、古代から明治までの倫理思想を描き出した。倫理学は仏教や朱子学など体系性を持った外来思想であり、中国の思想になってしまったため、倫理思想という言葉で日本の倫理思想史を題材にしたもので、和辻の持つナショナルリズム、天皇観が現れている。西田幾多郎などと同じく日本独自の哲学体系を目指した京都学派の一人として扱われる一方、東大倫理学教室教授として、相良亨らを始め多くの後進を育てた。五五年に文化勲章を受章。

安全性に関する不安については「中国電力には安全に対する意識改革の徹底を求め、国には検査等を通じたその安全に対する姿勢や取組の確認を求めるとともに、必要に応じ安全協定に基づき立入り調査を行う」として、周辺住民の安全確保に万全を期す姿勢を改めて強調した。防災対策については、避難に必要な道路・輸送手段、要支援者の避難先、感染症流行下における防護措置など、国・関係機関・電力と連携した対応策を述べた上で、「訓練や避難方法の周知などを通じ、避難計画の実効性を高めるための取組を継続していく」と説明した。また、エネルギー政策における原子力の位置付けに関しては、国による「再生可能エネルギーと省エネルギーだけで電力を安定的に賄うことは、現状では困難。原子力発電が一定の役割を果たしている」との説明を理解したと明言。さらに、中国電力が示した「中海・宍道湖・大山圏域では、年間二二〇億円に上る経済効果があり、発電所に従事する人の半数程度が居住している」とする地域経済・雇用に及ぼす



中国電力島根原子力発電所2号機
<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/13349.html>

身の偉大な哲学者（その二）を紹介したい。一九〇二年にウィーンに生まれたカール・ポパーは、ウィーン大学に入学し、二八年に哲学の博士号を取得した。三〇年から六年間中学校で教鞭を取った後、三七年に「科学的発見の論理」を発表。三七年、ナチスによるオーストリア併合の脅威が高まると、ニュージーランドに移住し、カンタベリー大学で哲学講師となり、「開かれた社会とその敵」を執筆した。第二次世界大戦後イギリスに移り、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスにて科学的方法の助教授を経て、教授となる。五八年から一年間「アリストテリアン・ソサイエティ」誌の編集責任者を務めた。純粋な科学的言説の必要条件として反証可能性を提起し、批判的合理主義に立脚した科学哲学及び科学的方法の研究の他、社会主義や全体主義を批判するなど社会哲学や政治哲学も展開。フロイトの精神分析やアドラーの個人心理学、マルクス主義の歴史理論、人種主義的な歴史解釈を疑似科学を伴った理論として批判した。六五年に女王エリザベス二世からナイトに叙任され、七六年には王立協会フェローに選ばれた。六九年に学界を退いたが、九四年に亡くなるまでポパーは学術的影響を与え続けた。影響を受けた哲学者として、ポール・ファイヤアーベントらがいる。経済学者フリードリヒ・ハイエクとは友人関係だった。投資家ジョージ・ソロスはポパー哲学から多大な影響を受けた。

余談であるが、筆者は島根県原子力安全顧問会議のメンバーとして島根2号機の安全評価に少々タッチした。ポパーは読んだことはないが、学生時代の下宿が左京区にあったこともあり、和辻の「古寺巡礼」だけは読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な哲学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部にご撮影をお願いしたウィーン大学の中庭にある



「中海・宍道湖・大山圏域では、年間二二〇億円に上る経済効果があり、発電所に従事する人の半数程度が居住している」とする地域経済・雇用に及ぼす

哲郎は、旧制姫路中学校を卒業後、第一高等学校に入学。一九二二年に東京帝国大学哲学科を卒業し大

カール・ポパーの胸像の写真を掲載させていただく。



■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています : <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

本誌執筆者の主な著作

- 河野純一著「不思議なウィーン」
- 河野純一著「ウィーン遺聞」
- 河野純一著「ウィーンのドイツ語」
- 河野純一著「横顔のウィーン」
- 須永恆雄訳「ウィーンの内部への旅」
- 須永恆雄編訳「マーラー全歌詞対訳集」
- 近藤常恭著「ウィーンの街の物語」
- 福田和代共訳「サフィア」

